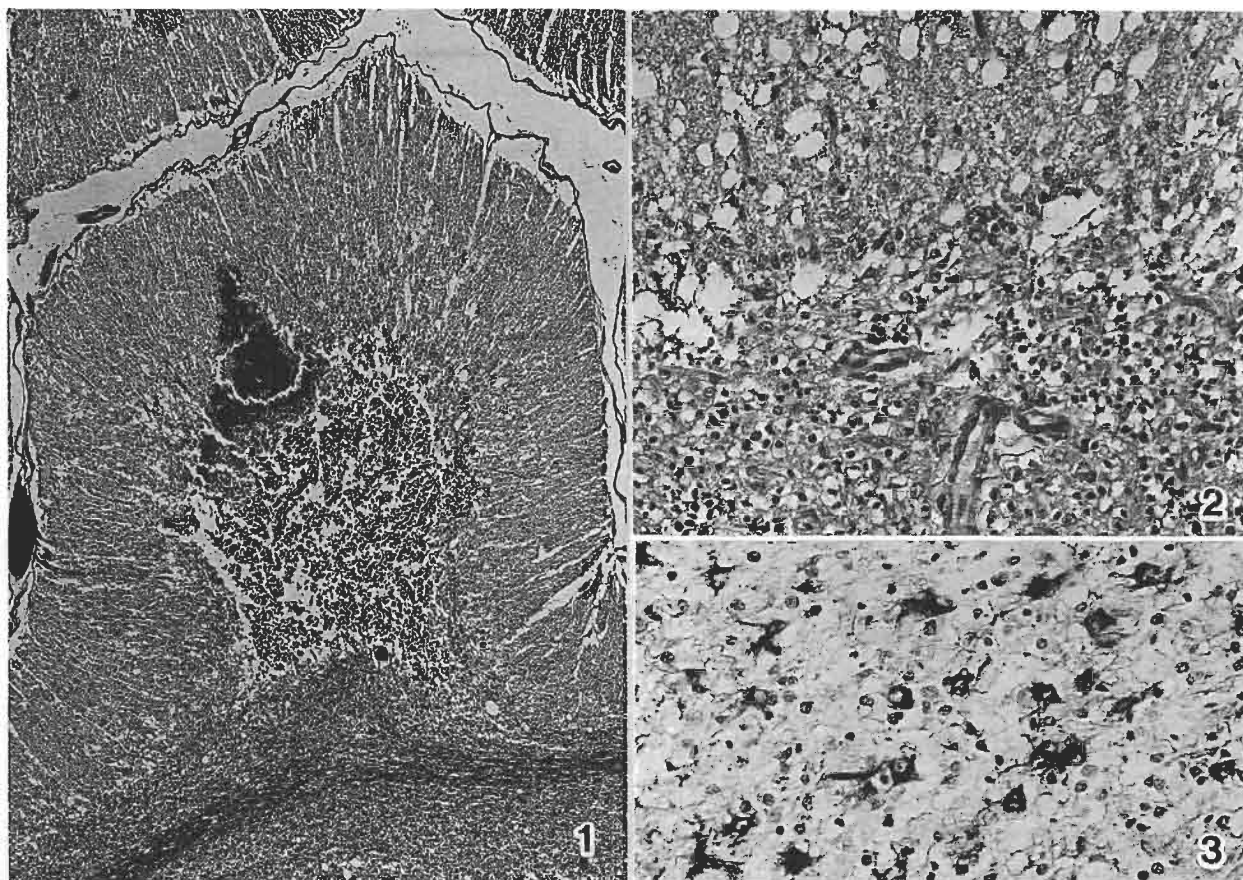


# 馬の小脳

北海道大学獣医学部比較病理学講座出題 第33回獣医病理学研修会標本No.598



**動物：**馬，サラブレッド種，雌，4カ月齢。

**臨床事項：**1991年7月初旬，肺炎と診断され，加療。8月初旬より，後軀蹠踉，視力低下を示し，同月9日起立不能，13日遊泳運動を示したため，予後不良とされ，16日安楽死された。

**剖検所見：**1. 脳脊髄液の中等度増量。2. 10×1.5 cm面大に至る胃潰瘍散在。3. 四肢及び胸部皮膚の褥瘡と皮下出血。小脳は外見上異常なく，ホルマリン固定後，虫部矢状断にて虫部錘体から虫部垂深部に新鮮出血と軟化巣が所見された。

**組織所見：**錘体並びに垂の深部に出血と髄鞘の崩壊が見られ，ミエリンや赤血球を貪食するマクロファージが集簇していた(写真1，HE，×36)。また，各小葉の層構造は保たれていたが，概ね全ての小葉深部にプルキンエ細胞ならびに内顆粒層の変性・壊死・脱落が認められ，重度の病変部位では，分子層に空胞形成，籠細胞の脱落もしばしば認められた(写真2，HE，×180)。希薄となった内顆粒層では，残存するほとんどの顆粒細胞に核濃縮が見られ，ゴルジ細胞も減数していた(写真2)。この細胞層

には変化の程度に比例してGFAP陽性細胞が増数していた(写真3，GFAP，×240)。血管病変は小脳のいずれの部位にも認められなかった。神経系の他の部位では，下部脳幹及び脊髄に続発性変化とみなされる軸索の腫大，スフェロイド形成が散見された。神経系以外では，肝の多発性出血性壊死，心筋壊死，胃潰瘍，骨格筋変性，内臓諸臓器の小動脈壁の硝子化，角膜炎が所見された。

**考察及び診断：**本例が示した後軀蹠踉及び起立不能は，原始小脳の変性による原始小脳症候群と理解された。病因究明までには至らなかったが，ウイルス感染を積極的に示唆する組織所見は認められず，また，生化学的検査によって水銀中毒は否定された。研修会の席上，本例で認められた病変全体を梗塞に続発した軟化及び変性とする意見が出された。しかし，小脳皮質変性と軟化との直接的な因果関係が不十分であるため，提出標本の組織学的診断は病理所見を併記し，「サラブレッド種の仔馬の小脳軟化を伴う小脳皮質変性症」とした。